

人を敬い愛する心

松岡 敬

奨励者紹介〔まつおか・たかし〕

同志社大学長

同志社大学理工学部教授

〔研究テーマ〕機械設計、複合材料

わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなった。更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た。そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。「見よ、神の幕屋が人の間にあつて、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のもものは過ぎ去ったからである。」すると、玉座に座っておられる方が、「見よ、わたしは万物を新しくする」と言い、また、「書き記せ。これらの言葉は信頼でき、また真実である」と言われた。

(ヨハネの黙示録 21章1—5節)

はじめに

本日は、お集まりいただきありがとうございます。

先ず初めに、14日に熊本地域で地震があり、さらに本震と思われる巨大な地震が16日未明に熊本南阿蘇地域で起こりました。さらに、大分でも大きな地震が起こりその被害が拡大しております。この地震災害により多くの方々がお亡くなりになりました。さらに、10万人を超える方々が避難生活をされています。同志社大学長として亡くなられた方々に対して哀悼の意を表すると共に、避難生活をされている多くの方々に心よりお見舞い申し上げます。一日も早く元通りの生活を取り戻していただけることを願っております。

熊本は同志社にとっては大切な地です。熊本バンドが草創期の同志社にとってどれほど大きな影響をもたらしたかをご承知だと思います。同志社大学としても今後どのような支援をすることができるか、関係部署に検討するように依頼をさせていただきました。さまざまな支援のご協力を皆様にお願ひしますが、よろしくお願ひいたします。

それでは同志社大学長として逝去者追悼礼拝のメッセージを述べさせていただきます。2005年4月に起こったJR福知山線脱線事故及び福島のパス事故の犠牲となった本学学生を覚えて、毎年4月に追悼礼拝を行ってきました。これらの礼拝にはご遺族・友人を始め、多くの方々が出席され、故人を思い起こす大切な機会になっています。

2009年度からはこうした経緯を踏まえ、さらに直近の1年間に亡くなった現役の学生と教職員、また、同志社大学のこれまでの長い歴史において志半ばにして在学中に亡くなったすべての学生、在職中に

亡くなったすべての教職員のために、追悼の意を込めて追悼礼拝を行っております。お亡くなりになりました同志社関係者の皆様の魂の平安を心よりお祈りいたします。

大切な人を亡くした深い悲しみ、また故人に対する思いを、すべて語り尽くすことはできません。それは言葉で表現できないものだからです。それは沈黙の間の中で我々の心の中に語りかけてくるものなのかもしれません。愛する人、大切な人を失うことで初めて、私たちはこのような悲しみを経験するのだと思います。

人を敬い愛する心

人を愛する気持ちを大切にできる人は、人生にとって最も素晴らしい生き方をしている人ではないかと考えています。そこで今日は「人を敬い愛する心」、この言葉の意味を考えてみたいと思います。なぜ今日この言葉を取り上げ、話をしたいと思ったのかについて先ず述べさせていただきます。

ご承知のように、同志社の教育理念は「キリスト教主義」、「自由主義」、「国際主義」です。私はこれらの三つの主義を次のようにそれぞれの心に置き換えて表現し、考えることにしています。人を敬い愛する心(キリスト教主義)、個人を大切にする心(自由主義)、広い視野で世界を見つめ理解する心(国際主義)と考えています。実は、このように置き換えて考えてみると、私たちはどのように生きていかなければならないか、自分の人生を映し出す鏡を得ることができるのではないかと考えています。いつまでも当初の夢を追いかけるには強い気持ち(夢)をもち続けなければなりません。しかしその夢をもち続けて生きることは難しい。それが人間なのです。その過程の中で人は成長し続けるのだと思います。そして、それを支える力、エネルギーはさまざまな形で得ることができるのだと考えています。その中でも先ず、自ら自分の存在が実は想像を遥かに超えたエネルギーをもち得た存在であることを、信じるのが大切だと思っています。実は我々が力強く生きるためにはそれが必要なのです。人の価値は計り知れないものがあります。それを信じれば自分だけではなく同じように、他の多くの人もその莫大なエネルギーをもち持っていることに気づくはずで、だからこそ人を大切にする心が私たちが生きるためには大切であり、それは更なる大きなエネルギーに繋がるのだと私は考えています。このことについては、後ほど話をしたいと思います。

思いやり

先ほど言った三つの心の一つである「人を敬い愛する心」とは、人への「思いやり」が基本ではないかと私は思っています。実はこの「思いやり」が同志社大学の建学の精神である「良心教育」にも繋がるのだと最近私は考えるようになりました。

この言葉から、私たちは人への「思いやり」をいつまでも大切にしなければならないと感じ取っていただきたいと思います。大切な人を失ったとしても、我々はいつまでも、その人への「思いやり」をもち続けなければなりません。故人となっても、その人への「敬いと愛する心」をもち続けてくれることを願っています。

我々は一人で生きることはできません。常に多くの人たち、それは親であり、友であり、と共に支え合いながら、お互いを信じ、理解することで豊かな人生を送ることができるのです。常に忘れてはならないこと、そこには「思いやり」があるのです。「思いやり」は多くの場合、「優しさ」とも感じるでしょう。常に相手の

気持ちになり、話を聞き、問いかけに対して、真剣に答える。この気持ちは必ず相手に伝わります。その結果、お互いの強い信頼関係を築くことになるでしょう。我々は一生の間に多くの人々に会おうと思いますが、その中で深く思いを語り合える人に何人出会うことができるでしょうか。この一つ一つが、私たちの生きるための財産であり、生きた証なのです。その多くの出会いが豊かな人生を送ることに繋がるのではないのでしょうか。

その思いを伝えることのできる人がたとえ故人となっても、いつも沈黙の中で言葉を交わすこと、それも私たちの生きる力になるのではないかと思います。

その言葉は、悲しみと同時に、生きることの質、つまり今生きている生活の質を我々に問いかけてくるのかもしれない。人を敬う喜び、人を愛する喜びを考え、一日一日を大切に生きていくことを、新たに心に刻み込まなければならぬと思います。

自ら追い求める努力

少し話は変わりますが良い機会なので、新学期になりお迎えしました新入生に少しお話をしておきたいことがあります。

実はこの3月まで私は水泳部の部長をさせていただいておりました。学長になりましたので、部長は交代いたしました。部員の皆さんは個人個人よく頑張っておられました。水泳部の監督・コーチ・OBOG会長とお会いしてお話をさせていただく機会が多くありました。その中で、印象に残っていたのは団体戦で素晴らしい成績を残すことの難しさを知ることができたことです。当たり前ですが、1人だけが良くて団体戦では良い結果を残すことは不可能です。部員一人ひとりの考え方が日々の練習や行動に現れることとなります。部員一人ひとりの繋がりが、監督・コーチとの連携を強化し、チームとして成長していくのです。素晴らしいことです。この努力は基本(要素)は一人ひとりの「思いやり」がベースになっているように思います。私の専門である機械部品(機械要素)に置き換えて考えてみましょう。今から話をさせていただくことは、水泳部長としてHPの挨拶で紹介したことがあります。

新入生の皆さんには同志社大学で、新たに学術技芸に挑戦し、それぞれの目標に向かって懸命に取り組んでくれることを願っています。ただ、同志社大学に入学したことに満足するのではなく、これからの学生生活が有意義となるように、努力を重ねてもらいたと思います。長いようで短いのが大学の4年間です。大学時代こそ充実した日々を過ごし、大きく成長されることを願っています。充実した学生生活を過ごすには、ただ与えられた環境に同化するだけではなく、自分自ら追い求める努力(つまり挑戦)が必要です。

さて、私は大学における学生生活や教学における学年暦を、周期運動(1年周期)をしている円形(回転)運動にたとえて考えることがあります。そんなことは周知のこと、何を今更と、思うかもしれませんが、4年間として考えれば少し異なった形が見えてくるのです。それは、単純な円形ではなく、らせん形状に浮き上がった形を生み出すことです。成長する人ほど同じ場所、同じ場面をぐるぐる回るのは嫌で仕方がないはず。違った方向に回転しようとする、それはまさに上へと浮き上がって見えるらせん形状になるのです。動く速度やその方向が変わるだけでその形状は大きく変化するのです。ご承知のように、らせん形状と言えば、台風、竜巻など自然災害を引き起こす嫌な自然現象を思い浮かべるかもしれませんが、

これらの自然現象は莫大なエネルギーをもっています。明らかに想像を遥かに超えた動き(形)に変化するのです。身近ではらせん階段を上することも一段一段上へと上ることになります。いわゆる物理学で学んだ位置エネルギーが増加することになるのです。私の専門である機械要素(機械を構成する部品)の中では日常よく使うネジもらせん形状をしています。ネジをドライバーで回すことで大きな締め付け力を生み出すことができるのです。形状がもたらす不思議な魅力を感じるのです。

こんなことを考えてみると、大学4年間でどのようならせん形状を我々は描くことができるのか。この形は個人の努力によって大きく変えることができます。さらに、人それぞれの形を作ることができます。私たちはどのような形を描こうかと、いつも意識して日々の生活を送ることが大切ではないでしょうか。その一つ一つの積み重ね(らせん形状)が大きなエネルギーとなり、先ほど話したように個人個人の挑戦する原動力、エネルギーになるのだと考えています。今述べたことは個々の力をどのように伸ばすのかのたとえとして話をさせていただきました。

もう一つ異なった機械要素を例に挙げて社会との連携について考えてみたいと思います。よくご存知の歯車(ギヤ)です。この部品は精密にできています。なぜならば、歯車は円筒にいくつもの歯が等間隔に精度よくくっつけられたような形状をしています。それは歯と歯のかみ合いによって、回転し動力が伝えられ、他の歯車を動かすからであり、うまくかみ合わなければ動きません。まさに、歯車は一つの歯車が他の歯車を動かし、動力の伝達を行う大切な機械部品です。理工系を卒業した我々は社会で働くことを「人は一つの歯車である」とよく聞かされました。理工系の発想ですが、歯車を知っている者にとっては意外とわかりやすい喩です。歯車は組み合わせによって減速、増速をさせることができます。一方で、一つの歯が壊れても動かなくなることもあるのです。社会は個々の人々の努力と繋がり(連携)で動いていると考えると、機械と同じなのかもしれません。このように考えれば、社会にとって人は一つの歯車かもしれませんが、その役割は非常に大切であり、同時に責任も大きいと考えることができます。

社会を支えているのは皆さん一人ひとりです。歯車でたとえれば、まさに歯一つが人ひとりと言えるかもしれませんし、またあるいは、歯車そのものなのかもしれません。それぞれの役割は異なっても何一つ欠け落ちて動かないのです。社会において、我々一人ひとりの役割はそれぞれ異なりますが、その目標が同じであれば、その目標に向けて日々努力を重ねなければならないのです。「如何にして個々の目標を社会や組織の目標へと繋げることができるのか」、それを常に考え、我々は成長しなければなりません。このことが我々の役割であり責任であると同時に、我々一人ひとりの夢でもあるのです。そして、我々は、「個人の努力を敬い、愛をもって繋がり、目標に向かって挑戦する」、そんな仲間(関係)でなければならないと思っています。

ここでは機械部品を例に挙げながら話をさせていただきましたが、この話の中で皆さんの心の中に浮かんできたもの、それぞれを大切にしていきたいと思います。

生きる質とは

最後に、遠藤周作の『沈黙』の有名な一節を紹介して、逝去者追悼礼拝のメッセージを終わりたいと思います。本文からの抜粋です。

「司祭は足をあげた。足に鈍い重い痛みを感じた。それは形だけのことでなかった。自分は今、自分の

生涯の中で最も美しいと思ってきたもの、最も聖らかと信じたもの、最も人間の理想と夢にみたされたものを踏む。この足の痛み。その時、踏むがいいと銅版のあの人は司祭におかたって言った。踏むがいい。お前の足の痛さをこの私が一番よく知っている。踏むがいい。私はお前たちに踏まれるため、この世に生れ、お前たちの痛さを分つため十字架を背負ったのだ」（新潮社 1978年）。

「踏むがよい。お前のその足の痛みを、私がいちばんよく知っている。その痛みを分かつために私はこの世に生まれ、十字架を背負ったのだから」。これは、信者が踏絵を踏むことになる。すり減った銅板に刻まれた「神」の顔に近づけた彼の足を襲う激しい痛み。その時の踏絵の中のイエスの言葉なのです。

この言葉を、私なりに考えてみました。信者は自分の心とは異なる行動をとらなければ、拷問を科せられる。自分自身だけではなく、周りの人々にも大きな負担をかけることになる。苦しみの中で、自分の意志と反する行動をとることになる。この時、信者はこのイエスの言葉を心の中で聞く。この行動に駆り立てたものは、「私たちは神に愛されています」、このことを信じていたからだと思うのです。

この言葉から、私は「人を敬い愛する心」つまり「思いやり」をいつまでも大切にしなければならないこと、そして生きる質とは何かを改めて考えさせられました。

主なる神さま、不完全な私たちと共にいてください。

2016年4月20日 京田辺水曜チャペル・アワー「逝去者追悼礼拝奨励」記録